

# 大学生のエゴ・レジリエンスと自我同一性 および精神的健康の関係

目白大学大学院心理学研究科 畑 潮  
目白大学人間学部 小野寺敦子

## 【要 約】

Grotevant (1987) によれば、エゴ・レジリエンス (ER) は同一性形成の過程で役に立つ重要なパーソナリティ資源であるとされる。本研究では大学生を対象として、ERと自我同一性の形成について精神的健康との関連から検討した。また、自我同一性の形成状況を評価する指標として職業決定に関する明確度をとり上げ、次の3つ仮説によって検討した。1. 同一性達成地位は他の地位に比べてERが高く、精神的健康度が良好である 2. 同一性達成地位は他の地位に比べて職業決定の明確度が高い 3. 職業決定の明確度が高い人は、低い人に比べてERが高い。分析の結果、3つの仮説は概ね支持された。さらに、構造方程式モデルによってER、自我同一性、精神的健康の関連を男女別に検討した。ERが自我同一性の形成（とりわけ現実の自己投入水準）や精神的健康に対しプラスの影響をもつことが確認された。

キーワード：エゴ・レジリエンス、自我同一性、自我同一性地位、精神的健康

## I. 問題と目的

様々な発達段階を通じて、その時々の良い適応状況に影響を与える重要なパーソナリティ特性のひとつにエゴ・レジリエンス (Ego-Resiliency; 以下、ER) がある。ERは、Block (J.Block, 1963; 1965) によって明らかにされた概念で、自我を調整する力であり、内外のストレスにさらされたとき適切な適応状況に自我を導く力であるとされる (Block & Block, 1980; Klohnen, 1996)。Block & Block (1980) は、ERを「環境の変化や不測の事態への対処能力、その状況で求められることと行動の可能性との‘適合度の分析力’、問題解決方略における豊富なレパートリーの柔軟な発現力」によって説明している。ERに関する実証的研究は、幼児期のERから成人期のERまで多数報告されている。例えば、青年期では、ERの高い青年はパーソナリティが比較的成熟しており (Westenberg & Block, 1993)、満足行動の適切な遅延ができる (Funder & Block, 1989) ことが報告されてい

る。反対に、ERの低い青年は、習慣性の薬物使用 (J.Block, Block & Keyes, 1988) や、抑うつ症状 (Block, J.H. & Gjerde, 1990) との関連が報告されている。成人期では、Tugage & Fredrickson (2004) が、ERの高い人の方がストレスからのより早い心理的、情動的回復を示すことを明らかにしている。また、中年期女性の場合、ERの高い女性ほど中年期の生活への適応が良好であることが示されている (Klohnen, Vandewater, Young, 1996)。さらに、Pals (1999) は、1960年代に過渡的な時期である21歳から27歳であった女性の縦断研究を行ない、ERが婚姻状況を媒介して彼女たちのアイデンティティ確立を促す重要な要因であることを示唆している。

青年期後期に分類される大学生は、同一性；identity形成の時期 (Erikson, 1959 小此木訳 1973) にある。同一性は、Erikson (1959; 小此木訳 1973) の提唱した概念であり、青年期においては、自己を正しく理解し、自己のなか

に存在する多くの同一性の拡散の感覚を打ち破り、確立していくことが中心課題とされる。青年期後期は、「自分とは何か」「これからどう生きていくのか」「どんな職業についたらいいのか」「社会の中で自分なりに生きるにはどうしたらいいのか」といった問いを通して自分自身を形成していく時期である。そして、「これこそが本当の自分だ」といった実感のことを自我同一性：ego-identityと呼ぶ。この時期は多くの変化に遭遇し、成長と発達の機会を得る時期ともいえる。Grotevant (1987) は、Eriksonの自我同一性の探究を問題解決行動と捉えた。Grotevant (1987) によれば、この時期は、いろいろな領域（職業、イデオロギー、価値観、人間関係など）で自分あるいは自分の環境についての情報を取捨選択しながら重要な人生の自己決定を行う。そうした問題解決行動としての自我同一性の探究は、領域の文脈や個人的特徴に影響を受け、個人的特徴としてのERが探究と同一性形成にプラスに影響するとしている。

また、職業決定は青年期後期の重要な発達課題である。Erikson (1980) によれば、乳幼児期以来、漸次形成されてきた多数の同一化群が、青年期において社会的役割の獲得という形で統合され、アイデンティティの確立に至るとされる。その社会的役割の獲得において中心的な位置を占めるのが職業決定であり、アイデンティティの拡散・危機は職業決定の不可能という形で最もよく現れるという。Eriksonによって示されたこのアイデンティティ形成における職業決定の意義は、その後Munly (1975) によって実証的に確認されている。また、Marcia (1966) のアイデンティティ地位面接でも職業が重要な領域であるとしている。これらのことから下山 (1986) が指摘したように、職業決定は自我の確立のあり様を評価する重要な指標であると言える。

自我同一性の探究過程にある現在の大学生を取り巻く現実には厳しい。1990年代以降の長引く不況による就職難は、学校から「雇用への移行」の安定性を脅かし、「親からの自立」や「社会的自立」を難しくしている。「雇用への移行」プロセスが不安定化、長期化し、青年期のライフコースについて、かつてのような「標準」は想定

できなくなっている。彼らのアイデンティティ形成の「現場」ともいべき社会的コンテキストが変化している（児美川, 2006）。現代の大学生は、そうした現実に直面し、対応せざるを得ない状況にある。前述のとおり、ERは周囲のストレス、葛藤、変わりやすく不確定な状況下での個人の適応能力に密接な関係があり、日常の経験、対人関係、試練の場における良好な適応に重要な役割を果たすものである（Klohn, 1996）。また、Grotevant (1987) のように自我同一性の探求を問題解決行動として捉えるなら、「環境の変化や不測の事態への対処能力、その状況で求められることと行動の可能性との‘適合度の分析力’、問題解決方略における豊富なレパートリーの柔軟な発現力」であるERは、現代の大学生の自我同一性の探究の過程においても大いに関連していることが予測される。

## 目的と仮説

本研究では大学生を対象として、ERと青年期後期の発達課題である自我同一性との関連ならびにそれらと精神的健康度の関連を検討する。また、自我同一性の状況を示す指標として職業決定に関する明確度を取り上げる。そのため、本研究では以下の仮説検証を行う。

- 仮説1：同一性達成地位は他の地位に比べてERが高く、精神的健康度が良好である  
仮説2：同一性達成地位は他の地位に比べて職業決定の明確度が高い  
仮説3：職業決定の明確度が高い人は、低い人に比べてERが高い

## II. 方法

### 1. 調査協力者

山梨県および東京都の4大学の学生に実施回収した質問紙調査から男性394名（平均年齢＝19.92歳、 $SD = 1.12$ ）、女性219名（平均年齢＝19.98歳、 $SD = 1.11$ ）の計613名（平均年齢＝19.94歳、 $SD = 1.11$ ）を分析対象とした。調査の実施に際し、回答は任意であることを説明し、調査参加への同意を得た。

### 2. 実施時期

2011年7月～10月

### 3. 調査内容

#### 1) エゴ・レジリエンス (ER89日本語版) 尺度

Block & Kremen (1996) が作成したER89の14項目について、著者らがオリジナル項目の内容や意味、ニュアンスに留意して日本語訳を行った。その日本語訳から英文への翻訳をバイリンガル2名に依頼し、原版と異なった表現になった訳文に関し必要な修正を行った後、在日のネイティブスピーカーの意見を聞き、意味やニュアンスに誤りがないことを確認し、ER89日本語版尺度とした。その後、著者らの研究(畑・小野寺, 2007; 2009; 2011; 小野寺, 2008; 2009)の結果から、1項目「私は普段、行動する前に慎重に考える」について疑義が生じ、在日ネイティブスピーカーを交えて再検討し「私は何かするとき、アイデアがたくさん浮かぶほうだ; I usually think carefully about something before acting」に改訂した。回答方法は「非常にあてはまる: 4」から「全くあてはまらない: 1」までの4件法である。合計得点28-38点が低エゴ・レジリエンス, 39-42点が平均的エゴ・レジリエンス, 43-56点が高エ

ゴ・レジリエンスとされる (Blockら, 1996)。

#### 2) 自我同一性地位尺度

加藤(1983)が作成した同一性地位判定尺度を用いた。この尺度はMarcia(1996)の同一性地位の考えに基づいて作成されている。12項目(Table 1)で「現在への自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入への希求」の3変数の値から、分類基準(Table 2)によって6つの同一性地位を判定することができる。回答は「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの6件法で、最も高い水準に対応する反応を6点、最も低い水準に対応する反応を1点とする。

#### 3) 日本版GHQ精神健康調査票12項目版 (GHQ-12)

新納ら(2001)によって信頼性と妥当性が検証されたGHQ-12の12項目(4件法)を用いた。この尺度は、「不安・抑うつ」「活動障害」の2つ下位因子で構成され、得点が低いほど精神的健康度が高いことを示す。

#### 4) 職業決定の明確度

水野(1998)によって妥当性が検証された将来めざす職業決定の明確度(職業決定の明確

Table 1 自我同一性地位判定尺度の質問項目(加藤, 1983より引用)

#### 【現在の自己投入】

- ・私は今、自分の目標を成し遂げるために努力している 十
- ・私には、特に打ち込むものがない
- ・私は、自分がどんな人間で、何を望み、行おうとしているのかを知っている 十
- ・私は、「こんなことがしたい」という確かなイメージを持っていない

#### 【過去の危機】

- ・私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことがない
- ・私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということがかつて真剣に迷い、考えたことがある 十
- ・私は、親やまわりの人の期待にそった生き方することに疑問を感じたことはない
- ・私は以前、自分のそれまでの生き方に自信がもてなくなったことがある 十

#### 【将来の自己投入への希求】

- ・私は、一生懸命打ち込めるものを積極的に探し求めている 十
- ・私は、環境に応じて、何をすることになっても特にかまわない
- ・私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている 十
- ・私には、自分がこの人生で何か意味のあることができるとは思えない

十「非常にあてはまる」に6点、その他は「全くあてはまらない」に6点

Table 2 自我同一性地位の定義と分類基準(加藤, 1983より作成)

同一性達成 (A)	「現在の自己投入」 $\geq 20$ 「過去の危機」 $\geq 20$ 過去に高い水準の危機を経験したうえで、現在高い水準の自己投入を行っている者
A-F中間 (A-F)	「現在の自己投入」 $\geq 20$ 「過去の危機」 $= 19 \sim 15$ 中程度の危機を経験したうえで、現在高い水準の自己投入を行っている者
権威受容 (F)	「現在の自己投入」 $\geq 20$ 「過去の危機」 $\leq 14$ 過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者
積極的 モラトリアム (M)	「現在の自己投入」 $\leq 19$ 「将来の自己投入希求」 $\geq 20$ 現在は高い自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めている者
D-M中間 (D-M)	「現在の自己投入」 $\leq 19$ 「将来の自己投入希求」 $\leq 19$ 同一性拡散地位の条件に当てはまらない場合 現在の自己投入が中程度以下の者のうちで、その現在の自己投入の水準が同一性拡散地位ほどには低くはないが、将来の自己投入の希求の水準がモラトリアム地位ほどには高くない者
同一性拡散 (D)	「現在の自己投入」 $\leq 12$ 「将来の自己投入希求」 $\leq 14$ 現在低い自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱い者

\*自己投入: commitment = 自己定義を実現し自己を確認するための、独自の目標や対象への努力の傾注

度) 尺度を用いた。回答は、近い将来つきたい職業が明確になっている程度を5段階(1. まったくわからない 2. まだ、はっきりしない 3. してみたい仕事ならある 4. だいたい決まっている 5. はっきり決まっている)で求めた。得点が高いほど、職業決定の明確度が高いことを示す。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 各尺度の得点化と整理

##### 1) エゴ・レジリエンス尺度 (ER89)

14項目の主成分分析を行い、14項目すべてが第1成分に0.35以上の負荷を示したことから、原版と同様の1成分解を採用した。1成分解はデータの全分散の27.3%を説明していた。尺度全体の信頼性係数は、0.78で十分な値が得られたので、14項目の合計を項目数で除して「ER得点」とした。結果と項目ごとの平均(SD)ならびに合計を項目数で除したER得点をTable 3に示す。ER得点の性差は認められなかった( $t(611) = 0.17, n.s.$ )。

##### 2) 自我同一性地位尺度

12項目に関して、3因子を想定した因子分析(主因子法・プロマックス回転)を試みた。しかし、第1因子に現在の自己投入と将来の自己投

入の希求に分類される項目が混在し、加藤(1983)による分類と同じ構造を確認できなかった。本研究では加藤による構成概念とその項目を尊重し、加藤(1983)の分類基準に従って3つの変数—①一般的な(領域を特定しない)「現在の自己投入」の水準、②一般的な「過去の危機」の水準、③一般的な「将来の自己投入の希求」の水準—ごとに各4項目の合計得点を算出した。同一性地位を構成する3変数の調査対象者全体の平均と標準偏差は次のとおりで、過去の危機の水準に関してのみ、性差( $t(593) = 2.32, p < .05$ )が認められた(女性 $M = 16.3 >$ 男性 $M = 15.7$ )。

##### ①現在の自己投入

$M = 14.6$  (3.9) 範囲: 4-24, 中央値 = 14.0

##### ②過去の危機

$M = 15.9$  (3.2) 範囲: 5-24, 中央値 = 16.0

##### ③将来の自己投入の希求

$M = 15.2$  (3.2) 範囲: 4-24, 中央値 = 15.0

これらの平均値からは、D\_M中間地位であると判定されるが、加藤(1983)の結果の

##### ①現在の自己投入

$M = 17.2$  (3.3)

##### ②過去の危機

$M = 17.8$  (3.1)

## ③将来の自己投入の希求

$$M = 17.5 \quad (3.1)$$

と比較するといずれの得点も約2点程度低い。そのため、加藤の分類基準に従って同一性地位の分類を行うと分布が著しく偏る可能性が高いと考えられた。そこで、本研究では同一性地位間の特徴を統計的に比較検討するため、同一性の3変数の得点に基づき、ユークリッド距離を用いたk-means法によるクラスタ分析を行うこととした。その結果、4クラスタ解が最も妥当な解釈ができるものと考えられた。各クラスタ

の自我同一性を構成する3変数の違いを検討するため、3変数の得点を従属変数とする1要因の分散分析を行った。クラスタ間の3変数の得点にはすべて0.1%水準で有意な差が確認された。LSD法による多重比較の結果、すべてのクラスタ間の差も0.1%水準で有意であった (Table 4)。

クラスタ1は、現在の自己投入と将来の自己投入の値がともに最も低く、かつ平均値以下であったので「同一性拡散型」とした。クラスタ2は、過去の危機と将来の自己投入の値がとも

Table 3 ER89日本語版の主成分分析結果 (n=613)

項目	成分	平均	SD
	1		
3. 私は慣れていないことにも楽しみながら取り組むことができる	.696	2.54	.73
8. 私は人よりも好奇心が強いと思う	.642	2.87	.83
11. 私は新しいことをするのが好きだ	.642	2.92	.80
10. 私は何かするとき、アイデアがたくさん浮かぶほうだ	.613	2.42	.82
6. 私は人からとてもエネルギッシュな人だと思われる	.605	2.46	.85
4. 私は人にたいして好印象を与えることができる	.525	2.48	.75
12. 私は日々の生活の中で面白いと感じることが多い	.507	2.85	.82
1. 私は友達に対して思いやりがあり、親しい関係をもてる	.490	2.93	.68
2. 私はショックをうけることがあっても直ぐに立ち直るほうだ	.460	2.53	.93
14. 私は誰かのことで腹を立てても、すぐに機嫌が直る	.442	2.77	.85
13. 私は「かなり強い個性」の持ち主であると思う	.436	2.64	.88
9. 私の周りには、感じがよい人が多い	.386	3.21	.68
5. 私は今まで食べたことがない食べ物を試すことが好きだ	.366	2.54	1.00
7. 私はよく知っているところへ行くにも、違う道を通っていくのが好きだ	.352	2.73	.99
	$\alpha$ 係数	.78	

Table 4 自我同一性3変数のクラスタ分析と分散分析の結果

	平均値	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4	F値	多重比較
		拡散型	モラトリアム型	達成型	権威受容型		
現在の自己投入	14.6	9.12 (2.42)	13.55 (2.21)	19.5 (1.93)	14.87 (1.95)	474.13 ***	1<2<4<3
過去の危機	15.9	15.68 (3.11)	18.61 (2.30)	17.11 (3.00)	13.77 (2.10)	115.76 ***	4<1<3<2
将来の自己投入の希求	15.2	11.77 (2.77)	16.62 (2.45)	17.95 (2.32)	14.26 (2.16)	154.69 ***	1<4<2<3

注：( ) 内は標準偏差。多重比較はLSD法による。Df=3, 591 \*\*\* p<.001

に平均値以上で高いが、現在の自己投入の値が平均値以下で低いので「モラトリアム型」とした。クラスタ3は、現在の自己投入の値が最も高く、過去の危機の値も平均値以上で高かったので「同一性達成型」とした。クラスタ4は、現在の自己投入の値は平均値以上であったが、過去の危機の値が平均値以下で低かったため「権威受容型」とした。以下の分析はこの4分類で行った。同一性地位の分布 (Table 5) では、人数による分布に有意な性差は認められなかった ( $\chi^2 = 6.9, df = 3, n.s.$ )。男女ともに現在の自己投入の値は平均値以上で、過去の危機の値が平均値以下の権威受容型が最も多く約4割が該当した。これは、過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者だが、将来の自己投入の希求がやや希薄である。同一性拡散型 (現在低い自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も低い) は男女ともに最も少なかった。2番目に多く該当したのは、女性ではモラトリアム型 (現在は危機の経験途中にあり高い自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めている) で、男性では同一性達成型 (過去に高い水準の危機を経験したうえで、現在高い水準の自己投入を行

っていて、将来の自己投入も強く求めている) であった。

### 3) 日本版GHQ精神健康調査票12項目版 (GHQ-12)

12項目を新納ら (2001) にならい主因子法・バリマックス回転による因子分析を行い、2因子解が得られた。各6項目で構成される下位因子は、新納ら (2001) と同じ結果で各々「不安・抑うつ」と「活動障害」とした。GHQ12項目合計の信頼性係数 ( $\alpha = .86$ ) ならびに不安・抑うつ6項目の信頼性係数 ( $\alpha = .84$ )、活動障害6項目の信頼性係数 ( $\alpha = .79$ ) とともに十分な値が得られた。それぞれ下位因子6項目の合計を項目数で除して「活動障害得点」と「不安・抑うつ得点」とし、全体を「GHQ合計得点」とした。結果はTable 6に示す。性差は、GHQ合計得点、不安・抑うつに関して認められた。男性は女性と比べて不安・抑うつがなく精神的健康度が高いことが示された。

### 4) 職業決定の明確度

職業決定の明確度についての分布をTable 7に示す。職業決定の明確度では、だいたい決まっている、はっきり決まっているが約半数で、男性 (53.6%) の方が女性 (38.8%) より確定

Table 5 同一性地位の分布 (男女別)

	全体		男性		女性	
	人数	%	人数	%	人数	%
1. 同一性達成型	129	21.7	89	23.1	40	19.1
2. 権威受容型	235	39.5	161	41.7	74	35.4
3. 積極的モラトリアム型	132	22.2	75	19.4	57	27.3
4. 同一性拡散型	99	16.6	61	15.8	38	18.2
合計	595	100.0	386	100.0	209	100.0

Table 6 GHQ得点の平均値, 標準偏差

	全体 ( $n = 595$ )		男性 ( $n = 386$ )		女性 ( $n = 209$ )		性差 $t$ 値
	$M$	$SD$	$M$	$SD$	$M$	$SD$	
GHQ合計得点	4.59	1.11	4.52	1.12	4.72	1.08	2.16*
不安・抑うつ	2.53	0.71	2.46	0.72	2.66	0.68	3.32**
活動障害	2.06	0.56	2.06	0.58	2.06	0.53	<i>n.s.</i>

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

している割合は高い。性差を確認したところ、有意な差が確認された ( $\chi^2 = 15.00, df = 4, p < .01$ )。

次に、職業決定の明確度を従属変数として自我同一性地位の1要因の分散分析を行った。自我同一性地位間の職業決定の明確度には有意な差 ( $F(3, 591) = 22.14, p < .001$ ) が確認された。LSD法による多重比較の結果は、Table 8のとおりであった。職業決定の明確度が、拡散型、権威受容型、モラトリアム型、達成型の順に高くなっているが、権威受容型とモラトリアム型との間には有意差がなく、職業意識の面からは同一性地位の分類が概ね妥当なものであることを示唆している。

## 2. ERと同一性地位の関連

ERと同一性地位の関連を検討するため、ERを従属変数とする自我同一性地位の1要因の分散分析を行った。自我同一性地位間のER得点には有意な差 ( $F(3, 591) = 32.99, p < .001$ ) が確認された。LSD法による多重比較の結果、権威受容型 ( $M = 2.66, SD = 0.36$ ) とモラトリア

ム型 ( $M = 2.71, SD = 0.38$ ) との間以外のすべての地位間の差は0.1%水準で有意であった。4つの同一性地位で最もER得点が高かったのは同一性達成型 ( $M = 2.96, SD = 0.44$ ) で、最もER得点が低かったのは同一性拡散型 ( $M = 2.25, SD = 0.41$ ) であった。男女別でも同様に自我同一性地位間のER得点には有意な差が確認された (男性:  $F(3, 382) = 223.21, p < .001$ ; 女性:  $F(3, 205) = 9.99, p < .001$ )。LSD法による多重比較の結果、男女別でも同様に権威受容型とモラトリアム型との間以外のすべての地位間の差は0.1~1%水準で有意であった (Figure 1)。

## 3. 同一性地位と精神的健康度の関連

さらに同一性地位と精神的健康度の関連を検討するため、精神的健康度 (GHQ合計得点) を従属変数として自我同一性地位の1要因の分散分析を行った。自我同一性地位間のGHQ合計得点には有意な差 ( $F(3, 591) = 37.76, p < .001$ ) が確認された。LSD法による多重比較の結果、同一性達成型 ( $M = 4.16, SD = 0.97$ ) と権威受

Table 7 職業の明確度の分布

	全体		男性		女性	
	人数	%	人数	%	人数	%
1. 全くわからない	34	5.5	19	4.8	15	6.8
2. まだ、はっきりしない	126	20.6	79	20.1	47	21.5
3. してみたい仕事ならある	152	24.8	83	21.1	69	31.5
4. だいたい決まっている	165	26.9	113	28.7	52	23.7
5. はっきり決まっている	131	21.4	98	24.9	33	15.1
※ 回答なし	5	0.8	2	0.5	3	1.4
合計	613	100.0	394	100.0	219	100.0

Table 8 同一性地位と職業決定の明確度の分散分析結果

	平均値	1. 達成型	2. 権威受容型	3. モラトリアム型	4. 拡散型	F値	多重比較
職業決定の明確度	3.38 (1.19)	3.95 (1.03)	3.34 (1.16)	3.39 (1.12)	2.72 (1.21)	22.13 ***	4<2<3<1

注1) ( )内は標準偏差。多重比較はLSD法による。df = 3, 591 \*\*\* p < .001

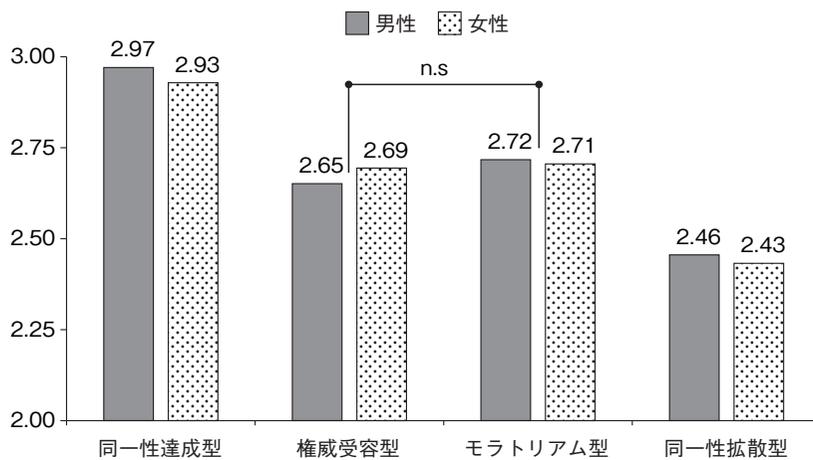
注2) 2. 権威受容型と3. モラトリアム型の間のみ有意差はなく、他はすべて有意差があった (p < .001)。

容型 ( $M = 4.33, SD = 0.99$ ) 間を除くすべての地位間の差は0.1%水準で有意であった。4つの同一性地位で最もGHQ合計得点が低かった(精神的健康度が良い)のは同一性達成型で、最もGHQ合計得点が高かった(精神的健康度が悪い)のは同一性拡散型 ( $M = 5.43, SD = 1.12$ ) であった。男女別でも同様に自我同一性地位間のGHQ合計得点には有意な差が確認された(男性:  $F(3, 382) = 34.05, p < .001$ ; 女性:  $F(3, 205) = 7.12, p < .001$ )。LSD法による多重比較の

結果、男性では、同一性達成型と権威受容型との間以外のすべての地位間の差は0.1%水準で有意であった。女性では、権威受容型とモラトリアム型との間以外のすべての地位間に0.1~5%水準で有意であった (Figure 2)。

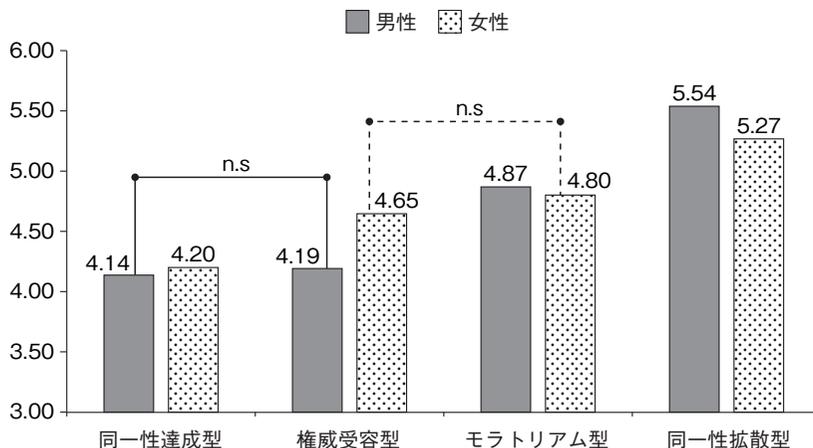
#### 4. ERと職業決定の明確度の関連

ERと職業決定の明確度の関連を検討するため、ERを従属変数とする職業決定明確度の1要因の分散分析を行った。職業決定の明確度5



注) 男女とも、権威受容型と積極的モラトリアム型との間以外、すべての地位間に有意な差 (0.1~1%水準) があった。

Figure 1 自我同一性地位とER得点



注) 男性では、同一性達成型と権威受容型との間以外、すべての地位間に有意な差 (0.1%水準) があった。女性では、権威受容型とモラトリアム型との間以外、すべての地位間に有意な差 (0.1~1%水準) があった。

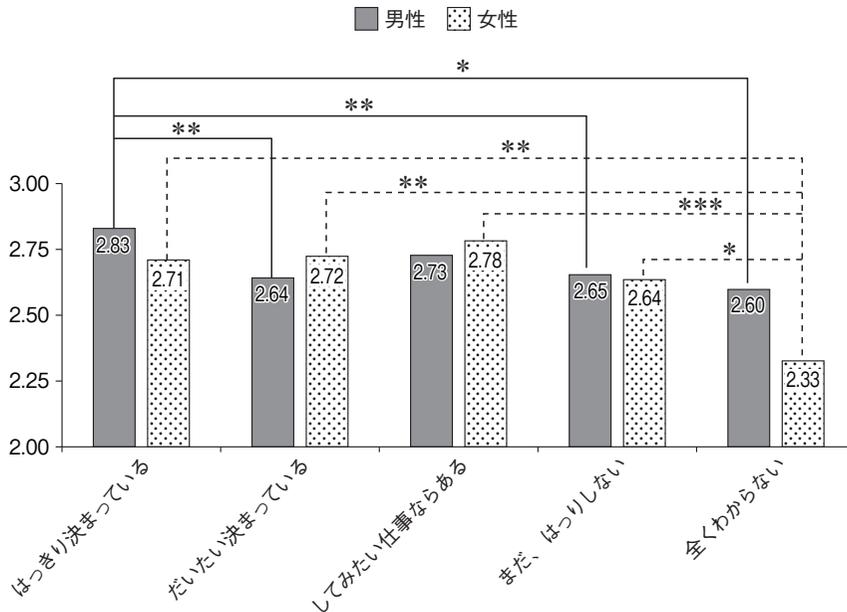
Figure 2 自我同一性地位との精神的健康度 (GHQ合計得点)

段階のER得点には有意な差 ( $F(4, 590) = 5.44, p < .001$ ) が確認された。LSD法による多重比較の結果、全くわからない ( $M = 2.48, SD = 0.33$ ) と他の明確度4段階とのER得点差は0.1%~5%水準で有意であった。また、はっきり決まっているは、してみたい仕事ならある ( $M = 2.75, SD = 0.39$ ) 以外の明確度3段階のER得点と0.1%~1%水準で有意差があった。職業決定の明確度で最もER得点が高かったのは、はっきり決まっている ( $M = 2.80, SD = 0.45$ ) で、最も低かったのは全くわからない ( $M = 2.48, SD = 0.34$ ) であった。男女別でも同様に職業決定の明確度5段階のER得点には有意な差が確認された (男性:  $F(4, 381) = 3.47, p < .01$ ; 女性:  $F(4, 204) = 3.82, p < .01$ )。LSD法による多重比較の結果、男性では、はっきり決まっていると全くわからない (5%水準)、まだはっきりしない (1%水準)、だいたい決まっている (1%水準) のER得点に有意な差が認められた。女性では、全く分からないと他の明確度4段階とのER得点に0.1%~5%水準の有意差があった

(Figure 3)。

### 5. 構造方程式モデルによる検討

ERと同一性地位、精神的健康度の関連を、Amos20.0を用いた最尤法による構造方程式モデルによって検討した。モデルの設定にあたり、精神的健康度 (GHQ) を目的変数、自我同一性地位の基準となる「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」および職業決定の明確度を説明変数とした強制投入法による重回帰分析を行い、その結果 ( $R^2 = .24, p < .01$ ) から有意な標準化偏回帰係数:  $\beta$  が得られなかった職業決定の明確度を除外することとした。設定したモデルは、ERが同一性地位を構成する「過去の危機」「現在の自己投入」「将来の自己投入の希求」の3変数を説明し、その3変数が精神的健康度 (GHQ) を説明する経路と直接ERが精神的健康度 (GHQ) を説明する経路である。分析は、精神的健康度 (GHQ) に男女差が認められたので、男女の多母集団による同時分析を行った (Figure 4-1, 4-2)。適合度は



注1) 男性では、「はっきり決まっている」と「全くわからない・まだはっきりしない・だいたい決まっている」の間に有意差 (1~5%水準) があった。

注2) 女性では、「全く分からない」とその他の段階に有意差 (0.1~5%水準) があった。

Figure 3 ERと職業決定の明確度

GFI = .995, AGFI = .923, RMSEA = .069であり、データによるモデルの説明率には問題はないと判断した。

標準化解で示された変数間の有意 ( $p < .05$ ) なパスの係数を見ると、男性の場合は「ER」と「現在の自己投入」(.44)と「現在の自己投入の希求」(.32)との関連が強く、「過去の危機」(.17)との関連は弱かった。さらに「精神的健

康度 (GHQ)」に向けては「現在の自己投入」から-.32, 「過去の危機」から.37で、「ER」から「精神的健康度 (GHQ)」への直接的な関連では-.21という値が得られた。男性のERは、直接的に精神的健康を良好に保つ役割を担う一方、現在の自己投入水準を媒介して精神的健康を良好に導く役割が示唆される。なお、影響はかなり小さく、現在の自己投入の水準によって打ち

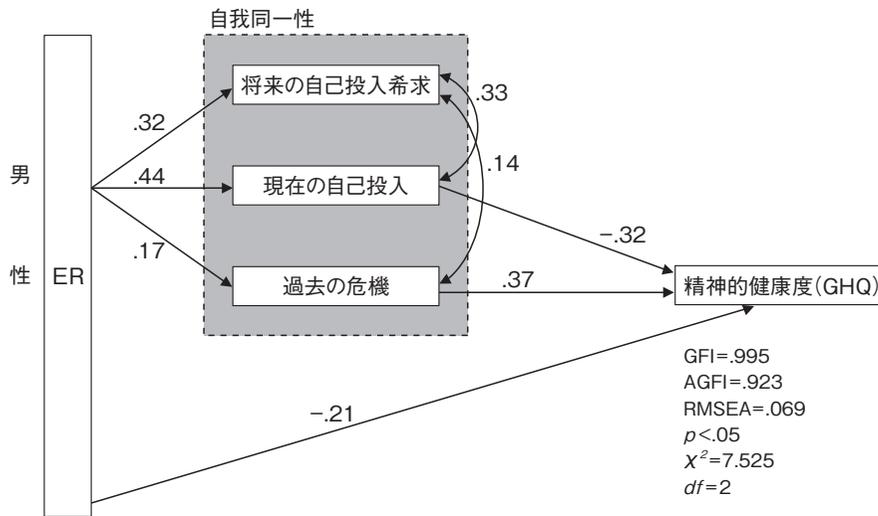


Figure 4-1 男性；ERと自我同一性、精神的健康度の関連  
(誤差項の記載省略、有意なパスと係数のみ表示)

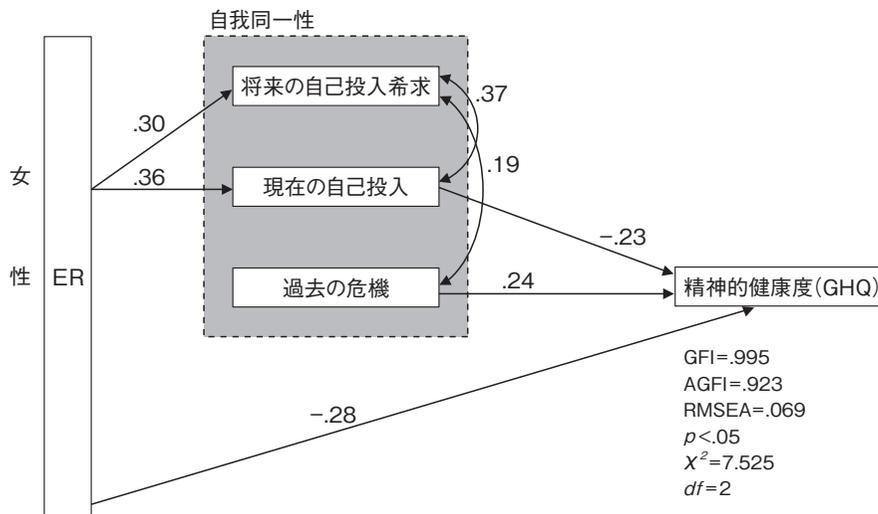


Figure 4-2 女性；ERと自我同一性、精神的健康度の関連  
(誤差項の記載省略、有意なパスと係数のみ表示)

消される可能性もあるが、過去の危機の水準の高さは精神的健康にあまり良い影響を及ぼさないようである。

対して女性の場合は「ER」と「現在の自己投入」(.36)と「将来の自己投入の希求」(.30)との関連が同程度あったが、「過去の危機」との関連はなかった。さらに「精神的健康度 (GHQ)」に向けては「現在の自己投入」から-.23、「過去の危機」から.24で、「ER」から「精神的健康度 (GHQ)」への直接的な関連では-.28という値が得られた。女性のERは、直接的に精神的健康を良好に保つ役割を担う一方、現在の自己投入水準を媒介して精神的健康を良好に導く役割が示唆される。ただし、男性の場合とは違ってERと過去の危機の水準との関連はないため、精神的健康にマイナスの影響を与える過去の危機の水準が、現在の自己投入を媒介したERの間接的影響を上回っている。精神的健康が男性より女性の方が良くなかった結果と符合すると考える。

#### IV. 考察

##### 1. 自我同一性地位の判定と分類

本研究では、加藤(1983)の同一性地位判定尺度を用いたが、因子分析を行わず、加藤による構成概念とその項目分類を尊重し、同一性地位の判定基準となる「現在の自己投入」「将来の自己投入の希求」「過去の危機」の3変数の得点を各4項目の合計から算出した。また、得られた得点結果は全般に低い値で、加藤(1983)の判定基準で分類を行うと(それが厳密な実態の反映であったとしても)著しく分布が偏り、同一性地位間の統計的な比較検討が難しいと判断された。本研究では基準となる3変数の得点を用いてk-means法によるクラスタ分析を採用し、4クラスタ解(同一性達成型・権威受容型・モラトリアム型・同一性拡散型)を得た。同じ加藤(1983)の同一性地位判定尺度を使用した野村・橋本(2006)や佐藤・岡本(2010)も下位尺度の構造が一致しておらず、それぞれの中央値に基づいてカットオフ・ポイントを設定して分類を試み、分布の偏りを回避している。本研究ではカットオフ・ポイントを設定せず、3変数の得点を用いたクラスタ分析を採用

した。同一性地位の分布に関しては、先行研究(例えば、加藤, 1983; 都筑, 1993; 野村・橋本, 2006; 佐藤・岡本, 2010)と同様に性差は認められなかった。また、3変数の得点は全般的に低く、加藤(1983)の結果と比較すると「現在の自己投入」の得点差(2.5点)が顕著であった。結果はクラスタ分析によるサンプル集団内の相対的な分類であり、分類基準の異なる研究と単純に比較するには注意を要すると考えるが、同一性の探究に関わっている現代の大学生の社会的環境が先行研究の行われた1980年代とは異なってきていることが影響しているとも考えられる。特に全体の約40%を占めた権威受容型は、過去危機の水準の低さとともに将来の自己投入の水準も低い。また、職業決定の明確度も低く、社会的役割の獲得が覚束ない様子が見られる。加藤(1983)の分類に準拠すれば、今回の対象者の約40%を占めた権威受容型は、現在、高い水準で自己投入しているが、危機経験を経たうえで自己投入ではなく、親や社会通念が支持するものを取り入れて自らの自己投入の対象としている者である。約20%強のモラトリアム型は、現在、高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入の対象を主体的に獲得しようとして、現在危機の中で積極的な努力を行っている者である。現実の就職状況は少しずつ改善の兆しはあるものの、正規雇用の減少や就職浪人の増加傾向は続いている。卒業後の進路について将来の見通しが立てられず、悩んだり、もしくは考えることを放棄したりする可能性も推察できる。今回の調査対象は学部2年生が中心である。データからは、漠然とした将来よりも今を大切に、現在を中心に考える学生像が浮かび上がる。

##### 2. 仮説の検証

(1) ERと同一性地位の分散分析ならびに精神的健康度と同一性地位の分散分析の結果から、同一性地位間のER得点、GHQ合計得点に有意差が確認され、同一性達成型は拡散型よりも有意にER得点が高く、精神的健康度は良好であった。ただし、GHQ合計得点で同一性達成型と権威受容型には有意な差が認められなかった。従って、仮説1「同一性達成地位は他の地

位に比べてERが高く、精神的健康度が良好である」は、ほぼ支持されたと考える。本研究における同一性達成型は、現在の自己投入の水準の高さが特徴である。その現在の自己投入（自己を確認するための目標の自覚や達成のための努力）に対して、パーソナリティ特性としてのERがプラスに影響していると考えられる。Grotevant（1987）の指摘どおり、ERは精神的健康を良好に保つ働きと合わせて、現在の探究活動への適応的な支援を行う役割を担うことが示唆された。

（2）同一性形成の指標として取り上げた職業決定の明確度を従属変数とする自我同一性地位の分散分析の結果、同一性地位間の職業決定の明確度には有意な差が確認された。職業決定の明確度は達成型が一番高く、拡散型が最も低かったが、権威受容型とモラトリアム型との間には有意差はなかった。従って、仮説2「同一性達成地位は他の地位に比べて職業決定の明確度が高い」は、ほぼ支持されたと考える。大まかにみると、職業決定の明確度の高くなるほど自我同一性の確立は進んでいると考えられる。職業決定は自我同一性の形成過程における社会的役割の獲得の目安となる重要な指標とされ（下山, 1986）、達成型はある程度の社会的役割の獲得ができているのに対し、拡散型は未だ社会的役割の獲得ができていないことがうかがえる。今回の対象者の大部分を占めた権威受容型、モラトリアム型はその中間に位置するものであろう。

（3）ERと職業決定の明確度との分散分析の結果では、明確度5段階のER得点に有意差が認められ、「はっきり決まっている」人は、「全く分からない」「まだ、はっきりしない」「だいたい決まっている」とした人より有意にER得点は高かったが、中間の「してみたい仕事ならある」とした人との有意差はなかった。従って、仮説3「職業の明確度の高い人は、低い人に比べてERが高い」は、ほぼ支持されたとと言える。この結果は、ERと自我同一性地位の4区分の関連結果とも一致している。職業決定の明確度には、状況に対して柔軟に対応し、可能性を見極め、多くの問題解決方略を試みるERのパーソナリティ特性が関連していると考えられ

る。

### 3. ERと自我同一性、精神的健康の関連

構造方程式モデルによる男女の多母集団同時分析の結果、男性では、ERは直接的に精神的健康を良好に保つ役割を担うと同時に、現在の自己投入水準を媒介して精神的健康を良好に導く役割が示唆された。女性の場合はERと過去の危機の水準との関連がなかった。過去の危機の水準は精神的健康にマイナスの影響を及ぼすため、現在の自己投入の水準のプラスの影響を上回り、結果として精神的健康への間接的な影響は小さくなると考えられる。このことは、本研究ではER得点に性差はなく、過去の危機と精神的健康度（GHQ）に性差が認められた結果と符合し、男性の方が女性より過去の危機の水準が低く精神的健康度は良好であった。

### 4. まとめ

本研究では大学生を対象として、ERと自我同一性（青年期後期の発達課題）ならびにそれらと精神的健康との関連を検討した。また、自我同一性の形成状況を評価する指標として職業決定に関する明確度を取り上げた。ERに関する実証研究は本邦では極めて少ないため、本研究ではERの構成概念と周辺研究の情報によって3つ仮説を立てて検証した。分析の結果、仮説は概ね支持され、①同一性達成地位は他の地位に比べてERが高く、精神的健康度が良好であること、②同一性達成地位は他の地位に比べて職業決定の明確度が高いこと、③職業決定の明確度が高い人は、低い人に比べてERが高いことが明らかとなった。さらに、構造方程式モデルによってER、自我同一性、精神的健康の関連を男女別に検討した結果、ERが自我同一性の確立（とりわけ現実の自己投入水準）および精神的健康に対しプラスの影響をもつことが確認された。同一性地位：identity statusの意味するところは、同一性の形成という発達課題への対処、その解決様式である（加藤, 1983）。この同一性の形成に「環境の変化や不測の事態への対処能力、その状況で求められることと行動の可能性との‘適合度の分析力’、問題解決方略における豊富なレパトリーの柔軟な発現力」

として説明されるパーソナリティ特性としてのERが関連していることが明らかとなったと考ええる。

本研究の結果はクラスタ分析によるサンプル集団内の相対的な分類であり、分類基準の異なる自我同一性や職業決定に関する他の研究と単純に比較はできないが、同一性の探究に関わっている現代の大学生の社会的環境が先行研究の行われた1980年代とは異なってきていることが反映されている可能性は否定できないと考える。

### 【引用文献】

- Block, J., & Turula, E. (1963). Identification, ego control, and adjustment. *Child Development*, **34**, 945-953.
- Block, J. (1965). The challenge of response sets: Unconfounding meaning, acquiescence, and social desirability in the MMPI. *New York: Appleton-Century-Crofts*.
- Block, J.H., & Block, J. (1980). The role of ego-control and ego-resiliency in organization of behavior. In W.A. Collins (Ed.), *Minnesota symposia on child psychology*, Vol.13, pp39-101. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Block, J., Block, J.H., & Keyes, S. (1988). Longitudinally foretelling drug usage in adolescence: Early childhood personality and environmental precursors. *Child Development*, **59**, 336-355.
- Block, J.H. & Gjerde, P.F. (1990). Depressive symptoms in late adolescence: A longitudinal perspective on personality antecedents. In J. Rolf, A.S.Masten, D.Cicchetti, K.H.Nuechterlein, & S.Weintraub (Eds.), *Risk and protective factors in the development of psychology*, pp.334-360. New York, NY: Cambridge University Press.
- Block, J.& Kremen, A.M. (1996). IQ and ego-resiliency: conceptual and empirical connections and Separateness. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.70, No.2, pp349-361.
- Cottle, T.J. (1967). The circles test: an investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Technique & Personality Assessment*, **31**, 58-71.
- Erikson, E.H. (1959) Identity and the Life Cycle. (小此木啓吾訳編 1973 『自我同一性』 誠心書房)
- Funder, D.C., Block, J. (1989). The role of ego-control, ego-resiliency, and IQ in delay of gratification in adolescence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 1041-1050.
- Grotevant, H.D. (1987). Toward a Process Model of Identity Foemation. *Journal of Adolescent Research*, **2**, no.3, pp203-222.
- 加藤 厚 (1983). 大学生における同一性の諸相, *教育心理学研究*, **31**, 292-302.
- 木村愛・小林正幸・松田修 (2003). 大学生のストレス過程に関する研究, *東京学芸大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要*, **27**, pp27-40.
- 児美川孝一郎 (2006). 若者とアイデンティティ, *法政大学出版局*
- Klohn, E.C. (1996). Conceptual analysis and measurement of the construct of ego-resiliency. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, No.5, 1067-1079.
- Klohn EC, Vandewater EA, Young A. (1996). Negotiating the middle years: ego-resiliency and successful midlife adjustment in women. *Psychology and Aging*, **11**, 431-442.
- Lewin, K. (1951). Field theory and social science. New York: HaperCollins Publishers, (レヴィン, K. 猪俣佐登留訳 1979 『社会科学における場の理論』 誠信書房)
- Marcia, J.E. (1966). Development and validation of ego identity status. *J. Personal. Soc. Psychol.*, **3**, 551-558.
- 水野正憲 (1998). 自我同一性の型を測定する質問紙「自我同一性パターン尺度IPS」の検討, *岡山大学教育学部研究集録*, **107**, 151-158.
- Munly, P.H. (1975). Erik Erikson's theory of psychosocial development and vocational behavior. *Journal of Counseling Psychology*, **22**, 314-319.
- Munly, P.H. (1977). Erikson's theory of psychosocial development and career development. *Journal of Vocational Behavior*, **10**, 261-269.
- 新納美美・森俊夫 (2001). 企業労働者への調査に基づいた日本版GHQ精神健康調査票12項目版 (GHQ-12) の信頼性と妥当性の検討, *精神医学*, **43**, 431-436.
- Pals, J.L. (1999). Identity consolidation in early adulthood: Relations with ego-resiliency, the context of marriage, and personality change.

*Journal of Personality*, **67**, 295-329.

下山晴彦 (1986). 大学生の職業未決定の研究, 教育心理学研究, **34**, 20-30.

Tugade, M.M., & Fredrickson, B.L. (2004). Resilient individuals use positive emotion to bounce back from negative emotional experiences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **86**, 320-333.

Westenberg, P.M., & Block, J. (1993). Ego development and individual differences in personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 792-800.

— 2012. 9. 26 受稿, 2012. 11. 16 受理 —

## Ego-resilience, identity status and mental health in undergraduates

Ushio Hata                      Mejiro University, Graduate School of Psychology  
Atsuko Onodera                Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2013 vol.9

### **【Abstract】**

According to Grotevant (1987), ego-resilience (ER) is an important personality resource in the process of identity formation. In this study, ER and identity formation were examined in connection with undergraduates' mental health. Also, the degree of vocational decision-making was used as an index to evaluate the effect of ER on identity formation. Three hypotheses were suggested: (1) Students in the identity achievement status have higher ER and better mental health than those in other statuses; (2) Students in the identity achievement status have a higher degree of vocational decision-making than those in other statuses; (3) Compared to students with a low degree of vocational decision-making, those with a high degree of the same possess higher ER. In addition, using a structural equation model, ER, identity formation, and mental health were examined by gender. We confirmed that ER positively influenced identity formation (particularly in present commitment level) and mental health.

**keywords** : ego-resilience, ego-identity, identity status, mental health